

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」地域活性化・まちづくりへの応援

メッセージ

会報

NO. 22

2014.12..28発行

編集責任：河地 清

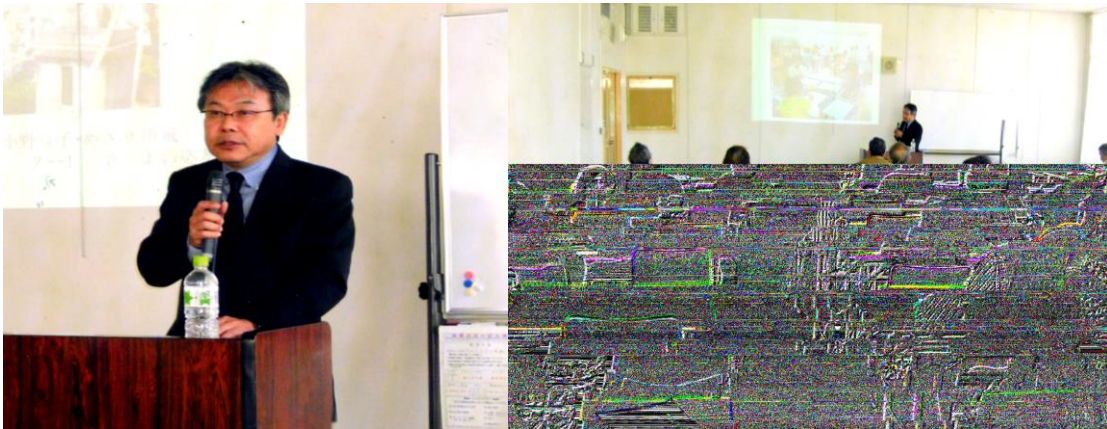
Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第 22 回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『書のまち春日井の書写教育の展望と課題』

12月7日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において第22回「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『書のまち春日井の書写教育の展望と課題』で開催しました。春日井市立小野小学校校長の宮田健一氏より講演いただいた。参加者は20名と少なかったが、1936年(昭和11)より今日まで欠ける年なく続けられてきた「県下児童・生徒席上揮毫大会」の取り組みの報告は感動的なものでした。

講演のあと熱心に質疑応答がありました。



発表者：宮田 健一 氏

会場風景

－発表要旨－

「県下児童・生徒席上揮毫大会」は今年で79回目であった。小野小学校は創立123年、全校児童数は753名、学級数24学級の市内5番目の規模で、今後さらに増加の見込みという。校歌1番には「わがふるさとのおとうふうこう」(安藤直太郎作詞)とある。

「県下児童・生徒席上揮毫大会」(競書大会)は昭和11年(1936)、小野道風公遺徳顕彰会が主催してはじまった。「空襲警報の中でも、伊勢湾台風の年でも、現在まで絶えることなく続いた」というのが誇り。しかも、書道大会運営は前記顕彰会を構成する校区の会長・副会長、教員、ボランティアで、「行政に頼らず、文字通り学校と地域が一体となって活動してきた」ことも誇りだ。

I 「県下児童・生徒席上揮毫大会の歩み」がうまくまとめられていると、2005年(平成17)10月23日付け中日新聞に載った古池康司記者の記事を添付された。それによると、1936年当時、小野尋常小学校(旧制)の先生だった書家の故藤田東谷(とうこく)さんらが、「この地が道風公生誕伝承地であることは、地元以外ではほとんど知られていない。競書大会を通して顕彰したい」と、席上揮毫大会を企画し、尾張地方の尋常小に参加を呼び掛けた。同年の11月、27校から約200人が同小に集まり、初の大会が実現した」という。その東谷さんは1949年から続く全国規模の書の公募展「道風展」を始めている。第6回揮毫大会の1941年太平洋戦争が始まり、存続を危ぶむ声もあったが、「東谷さんらは『一度途絶えたらなくなってしまう』と気概を示し、戦中も開き続けた」「戦後1947年の第12回大会からは、中学校も参加した。各校で選抜された小中学生が、学年ごとに与えられた課題を半紙につづる方式が定着した」「戦前は与えられた手本に忠実な字が多かったが、戦後は書道塾の指導を反映してか、さまざまな字体が目立つようになり、次第に大会の位置づけも高まった」という。「地元住民らでつくる小野小学校教育後援会が資金を集めて大会の運営を支えた。先生たちもふだんの仕事をしながら、課題の選定や会場準備などに励んだ」「1980年には校長を会長にして『小野道風公遺徳顕彰会』を発足させ、主催者としての組織を整えた」「尾張全域から常時70校700人が参加する大会になっていた」「毎回、各学年の優秀作1、2点は軸装され、校長室の耐火金庫に保管される」と新聞見出し「戦時中も続き今年70回目 顕彰に創設 書家・故藤田さん奮闘」の記事にまとめられた。70年分の優秀作品1,000点が2006年1月17日から22日まで開かれた春日井市文化フォーラムで一般公開された。今回の報告で「特選」以外の優秀作も保管されていたと明らかにされた。

II 小野小学校に「書道科」新設

「書のまち春日井 われら小野っ子 めざせ道風」をスローガンに書写教育に取り組んできたが、平成23(2011)年度から文科省より教育課程特例校に指定され「書道科」の研究を進めることになった。それまでは国語科における書写の授業と総合的学習の時間を利用した各学年10時間程度の総合書写としての取り組みをしてきた。書道科では1年生から毛筆を始めた。それまでは3年生から毛筆を始めていた。45分間の書道科の授業では、準備から後片付けまですることになり、筆を持って書く時間がわずかになってしまうため、全学年で使える「書写ルーム」を作った。床にターポリン(防水性を持たせたシート)を敷き、墨をこぼしても床に染み込まない環境を作った。机は風車の隊形にし、硯はその真ん中に1つだけ置き、共同使用とした。

こうすることで、一人ひとりが使える場所を広く取り、お互いの作品を見て鑑賞したり、相互批評したりしやすくなっている。ビデオでその様子が見せられた。個人で水書板を持たせ、1・2年生は学校の筆を使わせている。作品保管のためホルダーとして各自紙ばさみを作らせている。作品は、構内の専用掲示板に常時展示し、参考にし合えるようにしている。

年間30時間の書写の時間に、小野小独自の指導内容を加え、どの学年も年間35時間の

計画を作成し、指導実践に取り組んでいる。**実践の特色**は、①基本的に各学級担任が指導している。②1~2年生の低学年から毛筆を取り入れている。③書く技術の習得だけでなく、書への関心を高め、「書くこと」に慣れ親しめる内容を工夫し、書道科以外の学習とも関連づけて指導している--の3点。保護者にも12月の席上揮毫大会の作品展、2月の授業参観の折に構内書写作品展を鑑賞してもらっている。どの学年も校長による「特別講義」で小野道風の話聞いて学習することが伝統になっている。

「書の専門家による外部講師による指導実践も行い、3年生では「字手紙を書こう」をテーマにし、「父・母・友・馬」の1文字とメッセージを薄墨で書く。4年生では、自分で決めた1文字とメッセージ。5年生では、「古代文字を書こう」と、イメージに合う古代文字を選び和紙等を書く。6年生では、「大きな文字を書こう」と、大きな紙と筆で大きな文字を力いっぱい書く(武内峰敏先生、第31回大会で中1の時に最優秀賞)。また、書の専門家を外部講師として招聘しての教職員実技研修を2回行い、「象形文字を書く」「墨アートはがきづくり」(以上は波多野明翠先生)「文字の書き方の基礎」「書の親しみ方」(以上は風岡五城先生)から教えを受けた。どの先生にも指導できるように取り組んでいる。

Ⅲ ビデオ動画による書写・書道指導の様子は好評であった。各学年の授業の様子と構内展示の様子が映し出された。女性教諭による2年生を対象にした「も」の字の毛筆指導は特に印象に残る指導法であった。「トン スー トン」と声を出しながら先生の手本書きに、児童もまた声を出して「トン スー トン」とイメージを作り、次に筆で「トン スー トン」と各自が筆を走らせる。こうして毛筆に親しみながら書く様子は感動的であった。用紙に折り目をつけ、赤鉛筆で初めと終わりの位置をつけて練習し、次にしるしのない紙に書くと上達が早いという。どの先生にも指導できる技法が練られている。なお、西尾小も文科省特例校になっている。

研究フォーラムの参加者から「書写」教育から「書道」指導への取り組みの違いについての質問があったが、書写は国語教育の一環で、お手本通りに形を整えて書くことが目的。書道は現行学習指導要領では芸術教育である。小学校で書道の基礎がどのように追究されていくかが注目される。(記録：塚田 忠雄)

OPINION

脈々と伝えられ継承されている『道風の風景』

—全国に誇る書写教育の伝統—

春日井市立小野小学校は書写教育のモデル校です。言うまでもなく三蹟の一人小野道風生誕ゆかりの地であることによるものです。その特色のひとつに「書写教育」の実践があります。春日井市では小学校一年生から毛筆を使う授業があります。(現在は小野小学

校・西尾小学校の二校) 小野小学校では、「書のまち春日井われら小野っ子めざせ道風」をスローガンにして書写教育に取り組んでいます。工夫された書写の授業風景をビデオで見て生き生きと取り組んでいる子供達の姿に感動させられました。平成23年度からは、文部科学省より教育課程特別校に指定され、書写から「書道科」として書写教育が実践されています。昭和11年11月から開催されている、「県下児童生徒席上揮毫大会」は小野道風公ゆかりの地として書道教育の進展を願い始められたものです。戦時下においても「若し当日空襲警報ありたる時は解除を待つて・・・」行われました。防空壕も完備し、避難、引率などの職員は必死の覚悟で開催されたと伝えられています。

斯くして道風の遺徳と伝統は教育関係者および地域の人々の情熱と努力によって守られてきていることがわかりました。平成27年度からは市内小学校に「書道科」を20校に拡大されると聞いています。正に現代の「道風の風景」は教育現場の中で脈々と引き継がれてきています。



揮毫大会本番前の練習風景

この伝統行事を主体的に維持継続学校の直面する課題は、①来年は「県大会」80周年を迎えるので今から準備に予備日が設定できない悩みがある。品の保存が小野小学校単独では年々厳湿度調整、カビ防止の完備した保管庫社会の社会経済的、都市化による地域なって、地域の歴史文化＝「小野道風」れていかないように子供達へ伝えて行問題点があることを指摘されておられ



校庭に建つ「小野道風座像」



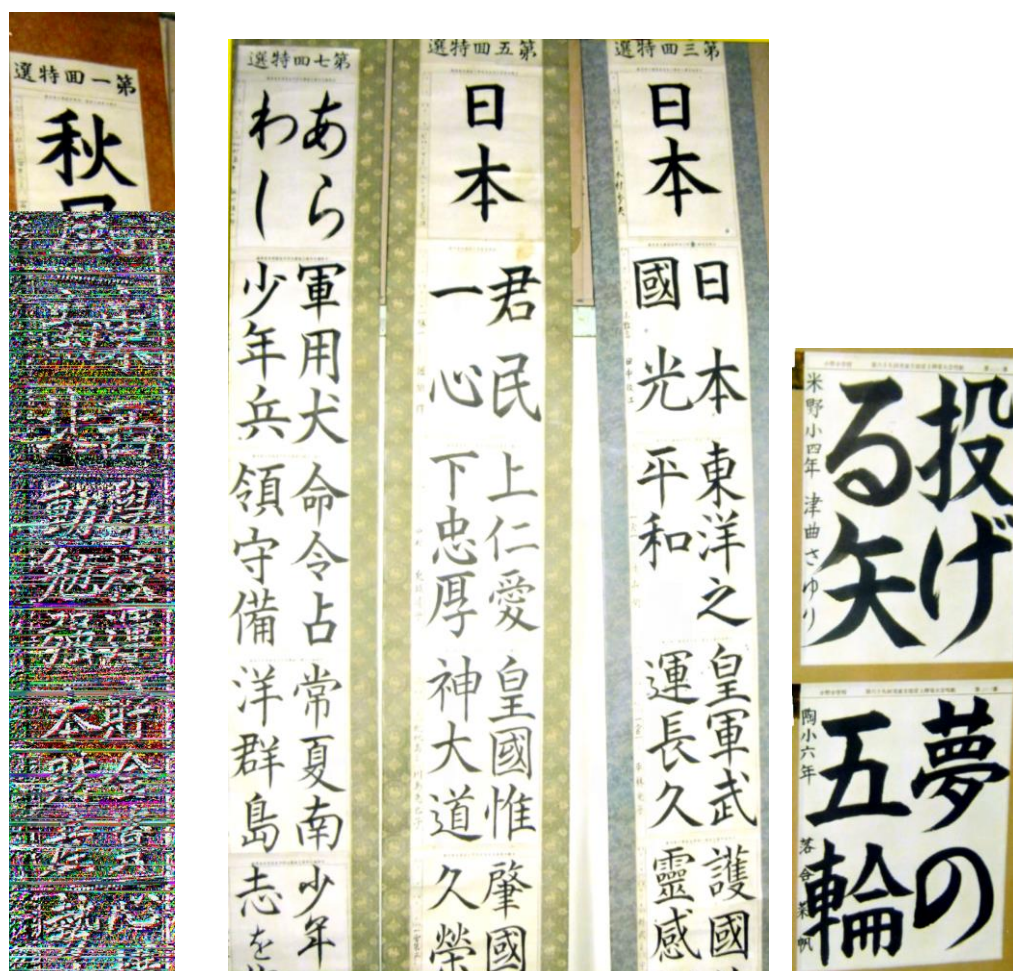
シンボルの壁面大看板

しておられる小野小下児童生徒席上揮毫に取りかかること。特②昭和11年からの作しくなっている。が必要である。③地域の構造的変化にともへの理解と認識が薄くこと。などの課題やました。

地域の重要な伝統的行事を一小学校が一身に担って今日まで継承されてこられたことに深甚の敬意をはらいたい気持ちになります。勿論地域の支援、行政の援助、保護者の理解と地域ぐるみの伝統を守り続ける地域力を感じさせられます。



校庭に建つ「山本南陽 書 書碑」



第一回（昭和11年）から今日までの特選作品（『五十年の歩み』より抜粋）

昭和11年第一回～平成26年79回までの特選作品は、小野小学校保管庫に所蔵され今日まで大切に保存管理されてきています。しかし、「湿度、温度などを精密にコントロール

できる設備は無いため、年月と共に癒、傷みの進行は避けられないという悩みをかかえている」と宮田校長先生は訴えてみえました。（文責：河地 清）

次回 FORUM のお知らせ

第 24 回テーマ『小野道風春日井誕生説の検証』

日 時：平成 27 年 2 月 1 日（日）13:30～15:30

場 所：市民活動支援センター・ささえ愛センター 2 階第 1 集会室

フォーラム内容：

道風が春日井で誕生したとするならば、幼少の時代どこでどのように学んだのか、神童といわれた道風は、どのような環境の中で人格形成されていったのか・・・
続きは FORUM で

発表者：塚田 忠雄 氏（「ふるさと春日井学」研究フォーラム副会長）

※資料代 500 円（非会員のみ徴収）

第 25 回テーマ『春日井の古代土地制度—条里制の検証を中心に—』

日 時：平成 27 年 3 月 1 日（日）13:30～15:30

場 所：市民活動支援センター・ささえ愛センター 2 階第 1 集会室

フォーラム内容：

ふるさと春日井の古代から中世にかけて条里制の存在形態がどのようなものであったのか醍醐寺（勝川廃寺）安食荘を中心に検証・・・続きは FORUM で

発表者：高橋 敏明 氏（春日井郷土史研究会会員）

※資料代 500 円（非会員のみ徴収）

第 26 回テーマ『書のまち春日井と空海—「景教碑」を中心に—』

日 時：平成 27 年 4 月 5 日（日）13:30～15:30

場 所：市民活動支援センター・ささえ愛センター 2 階第 1 集会室

フォーラム内容：

書のまち春日井と小野道風の関連についてはよく知られるところである。
三筆の空海と「書のまち春日井」について語られたことは、今までにはない。
弘法大師ゆかりの伝説、伝承が数多く残る春日井と空海の間を「景教碑」を通じて解説・・・続きは FORUM で

発表者：川口 一彦 氏（愛知福音キリスト教会 牧師）

※資料代 500 円（非会員のみ徴収）

〈事務局〉「ふるさと春日井学」研究フォーラム 会長 河地 清

TEL/FAX 0568-82-5973 メール：kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト : <http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学 **検 索** 